

男らしくない男

——デフォアの『シングルトン船長』について——

近藤 勝 志

序

『シングルトン船長』の正式の題名は *The Life, Adventures, and Piracies, of the famous Captain Singleton* (1721) である。J. Sutherland は『シングルトン船長』のことを、初めから終わりまで冒険物語であって、それ以外の何ものでもないと言っている。本論の課題はサザランドが指摘する冒険物語を「男らしさ」を手がかりにして具体的に読み直してることである。もう少し詳しく言えば、この作品は題名に謳われているように前半部のアフリカ横断旅行に代表される冒険と後半部の海賊行為に大別される。主人公はデフォアの他の主人公同様、孤児・捨て子という設定になっている。前近代社会の社会通念であろうが、子供への関心がきわめて低いことを指摘しておきたい。たとえば、モル (Moll Flanders) は5回の結婚で総計15人の子供を出産するわけであるが、子供の行く末に言及することは稀である。主人公のシングルTONはジャック大佐 (Colonel Jack) 同様孤児であり、教育の機会を逸しているためか、前後半を通じて国内にとどまるかぎり、男らしい生き方は叶わない。しかし国外に出るやアイデンティティの確立のため富の追求に邁進する。というよりむしろ「交換への欲望」という人間の本性ともいえる欲望に駆り立てられる。前半部ではアフリカ大陸での合法的な象牙、砂金採取などにより莫大な資産形成に成功し、教師役の砲手 (Gunner) の指導のもと、まがりなりにもイギリス人としてのアイデンティティを確立して帰国する。しかし本人の語るところでは、「教育はなし、美德・宗教心には無縁」な存在にすぎないためか帰国後短期間に資産を蕩尽し、元の無一文に戻ってしまう。後半部では人生の振り出しに戻ったシングルTONは前半部同様生きるため、海賊に身を転じ再起を図る。海上で出会ったクウェーカー教徒のウィリアム (William

Waters) の計らいで見事に海賊から商人へ転身し、商人としてのアイデンティティを確立して、無事帰国を果たす。しかし問題にしたいのは紳士階級への第一歩としての商人というアイデンティティを確立して、帰国を果たしても、シングルトンが英国内では *incognito* な生き方を強いられることである。別の言い方をすれば、この作品は紳士の子でありながら、George L. Mosse の言葉を借りれば、社会によって周縁化された、男らしさのいわば対抗的タイプともいえるシングルトンが奪われたアイデンティティを回復する物語として読めるということである。

I 子供時代・アフリカ横断旅行

まずシングルトンの生い立ちから見ていきたい。シングルトンはかなり裕福な両親のもとに生まれたということであるが、出自についての曖昧さは否めない。分かっていることは、子守 (Nursery Maid) の不手際のため、2歳の頃にイズリントン (Islington) 近くの原っぱで誘拐され、まず女の物乞いに売られたということだけである。つぎにジプシーの女性に12シリングで買い取られ、6歳まで一緒に各地を放浪する。ジプシーの母の処刑後12歳になるまで教区で厄介者として養育される。彼はある時、母と信じていたジプシーの女性から、彼女が実の母親でないことを知らされたり、ニューファウンドランド航路で行動を共にしていた親方からは、自分の子供があることを口実に、父親と呼ぶことを禁じられてしまう。このように幼少時から家族・家庭に恵まれないだけでなく、名前すら定かでない。ジプシーの母によれば、ボブ・シングルトン (Bob Singleton) という名前も洗礼名ではなく、単なる通称にすぎない。このように少年期までのシングルトンは、アイデンティティの不確かな物のような存在にすぎず、社会的な弱者であることが強調されている。

シングルトンが帰属するものを持たないことは、12歳の頃、乗っていた船がポルトガル船に拿捕されリスボンに係留中に、ポルトガル人老パイロットとの間に交わされるつぎのような会話からも明らかである。

「船を下りなさい」

「どこへ行けばいいですか」

「どこでもいい。なんなら、故郷へ帰りなさい」

「どうして帰らなければいけませんか」

「身寄りはないの」

「ありません。あの犬だけです」

と言って、犬を指さした。この犬は、さきほど肉片を盗んできて私のところへ置いてくれたので、それを食べたところだった。つまり、この犬だけが親友で、私の食事の世話をしてくれていた。(4)

シングルトンが伝統的な意味での冒険物語のヒーローから逸脱した人物であることは、犬並の生活を余儀なくされている境遇から明らかである。

帰属意識の希薄さは難破した船の修理が終わり皆でアフリカ大陸を目指すときの態度にも見られる。

私はそのことでは何も不安はなかった。行き先はどこでも構わなかった。前途に何が待っているかとか、自分の身に何が起こるか、あるいは起こらないかなどは考えてもみなかった。私の年齢では皆同じであろうが、提案されたことには、それがどんなに危険なことでも、成功の見込みがなくても、私は賛成した。(44)

帰属するものを持たないことについては物語の後半で、海賊生活に見切りをつけ、全うな生活に戻ることに関するシングルトンとウィリアムの対話をあげることができる。孤児であるシングルトンはホーム (Home) にあまり執着しない。取引のための取引、ましてや盗みのための盗みを働く輩はいないというウィリアムの言葉に対し、シングルトンは里心がついたのですかと反論する。それに対し、ウィリアムは国外にいる者にとって、資産形成の成就と望郷の念は不即不離の関係であり、それは自明の理でもあると説く。シングルトンは慈善学校育ちの身には、現在居住する場所こそがホームであり、従って資産の多寡とは関係なく、行き先を案じることはないと答える。(256)

シングルトンの根無し草的な人生を象徴するエピソードをもうひとつ挙げておきたい。シングルトンは、船上における謀反の咎でマダガスカル島に仲間とともに置き去りにされる。1年後仲間とともに脱出を敢行するが、貧弱なカヌーでは、航海というより、漂流に近い航行にならざるを得ない。

われわれは、本当に惨めだった。航海に出たが、航海しているとは言えなかった。どこかへ向かっているようで、向かっていなかった。自分たちのしたいことは分かっていたが、実際のところ何をしているのか分かっていた。(32)

このように家族・家庭さらに教育にも恵まれないシングルトンが生き延びるためとはいえ、

誘われるままに、船乗りという職業を選択することは、当然の成り行きであろう。

まず前半部のエピソードをいくつか具体的に見ていきたい。そこから透けて見えてくるものと、後半部の海賊らしからぬ生き方には通底するものがあるようである。船乗りとして英国を離れたシングルトンについて、まず指摘できることは、ジブシーとの放浪生活とか教区育ちのためか、教育を受ける機会を逸したことと、幼少時になめた辛苦のせい、周囲の情勢に対して善悪・正邪の判断をするよりは損得の判断をしがちなことと、自分の周囲の環境に概して敏捷な反応を示さないことである。

アフリカ横断のエピソードで注目すべき点は、まず、語り手（シングルトン）がアフリカの地誌・自然にあまり関心を示さないことである。たとえば、アフリカ大陸を横断中に、シングルトンのグループは、何度か大河に遭遇し、渡河に知恵をしぼったり、支流で金の採取に没頭したりするが、河幅の説明に際しては、グレイヴズエンド（Gravesend）の下流とか（64）、ウィンザー（Windsor）あたりのテムズ河とか、水深については、ロンドンフェリーの航行に支障をきたすほどの深さしかない（73）といった説明に終始する。動植物についても同様の説明が繰り返される。たとえば、野兎については、「英国の野兎より大型、敏捷性に欠けるが美味」といった具合である（113）。博物学的な関心が変わるものは、執拗な食糧と飲料水確保への言及である。

つぎに印象的なことは、シングルトンのグループと住民との関わりである。彼らはモザンビーク沿いに北上した場合、紅海（the Red Sea）でアラブ人につかまり、トルコ人に奴隷として売られる可能性が高いこと、またアラビア海を横切ってインドまで航行可能な船の建造はかなわないと結論づける。次善の策として浮上したのがアフリカ横断旅行である。一行はアフリカ大陸の横断を始める前、酷暑の砂漠横断が不可避なため、物資の運搬手段に悩まされる。シングルトンは、住民との間に諍いを起こし、諍いの収拾にかこつけて、住民を10余人捕縛し、奴隷化することで、ガイド役とか他の地域の住民との折衝、物資の運搬役をさせることを提案する。横断旅行中にシングルトンは頭角を現し、仲間からキャプテン・ボブ（Captain Bob）と呼ばれるようになり、事あるごとに指揮を執ることになる。一行が住民の奴隷化の口実を思案中に、一行にとって好都合なことに、住民の一部が交易中に不正行為をした挙げ句、先に攻撃を仕掛けてくる。これを機に、一行は銃による反撃に出て、60人前後の屈強な若者の捕縛に成功する。さらに戦闘中に負傷した住民の王子の怪我を完治させることで、王子に捕縛した住民の間接統治を担わせると同時に、住民の信頼を得ることに成功する。

マダガスカル島滞在時およびアフリカ大陸横断の冒険で頻繁に言及されるのが、集団による、生存のための創意工夫の数々である。食糧と真水の調達それに物資の運搬手段の確保等に集団で知恵をしぼる。『ロビンソン・クルーソー』（*The Life and Strange Surprising Adventures of*

Robinson Crusoe) の場合は、孤島でクルーソーが生存のために孤軍奮闘するわけであるが、『シングルトン船長』では、一行の中に砲手 (Gunner)、鉄細工師 (Cutler)、大工 (Carpenter) それに医師 (Surgeon) といった技術者が含まれている。面白いことに、4名の技術者の場合も、4人に特有の技術以外の事柄、たとえば、個性・風貌が紹介されることはない。ましてやそれ以外の人物は、細工物と交換した牛・山羊の干し肉づくり (コック見習い、34) とか、漏水防止用のピッチ・タールの代替品づくり (捕縛した現地住民、42) 等のように、生存のための技術に関わる時以外は、すべて関心の外におかれたままである。

時間軸に沿って前半部の主だった創意工夫を列挙するとつぎのようになる。

- ①細工物による交換 (鉄細工師、27)
- ②牛肉の保存 (船乗り、29)
- ③真水の保存 (大工、30)
- ④交換した牛・山羊の干し肉 (コック見習い、34)
- ⑤船の漏水防止用のピッチ・タールの代用品 (捕縛した住民、42)
- ⑥熱砂対策を施した靴 (全員、48)
- ⑦位置の測定 (砲手、50)
- ⑧カヌーの軽量化 (大工、70)
- ⑨保存食用のパンの製造 (全員、71)
- ⑩軽量マットの製造 (捕縛した王子、84)
- ⑪釣り針・干物 (鉄細工師、87)
- ⑫雨期用の住居の強化と猛獣対策用の柵と杭 (全員、99)

上の引用から透けて見えることは、4人の技術者が中心になっているとはいえ、グループ全体が、アフリカ大陸という言葉から連想される伝統的な冒険に関わるというよりむしろ、物を手に入れる喜びと、それ以上に物を生産・加工して付加価値をつけ、さらにことばの通じない相手との沈黙交易の喜びを描くことに、語りの軸足が移動していることである。前半部を総括すれば、まず指摘できることは、シングルトン一行は国外では徹底した植民地主義者であるということである。つまり国外では「男らしく」、生き生きとしてくるということである。たとえば、シングルトン一行は横断中、羅針盤 (Compass) によって常に方向を確認している。捕縛を解かれたとえ釈放されても、武器も羅針盤も持たない王子一行が猛獣のいる大陸を逆戻りすることは不可能に近いはずなのにそれについては一切触れようとしない。語り手の眼差しが、技術と工夫、先述したように細工物の沈黙交易と金の産出量の数値化、仲間内での均等配分の

方向に向けられたままであることもつけ加えておきたい。

最後に横断旅行中に出会った裸のイギリス人について触れておきたい。シングルトンの一行は、目的地である黄金海岸 (Gold Coast) 近くに到達したとき、シエラ・レオネ (Sierra Leone) のギニア会社 (English Guinea Company) の事務員 (Factor) をしていたイギリス人に出会う。シングルトンは裸のイギリス人について詳しい人物像の紹介を試みる。彼は紳士然としており、37歳前後、見たところ船乗りとか労働者階級の出ではない。ポルトガル語こそ話せないが、医者にはラテン語、相手によってはフランス語、イタリア語を使いこなす。シングルトンは今までに出会った人の人物像にこれだけのこだわりを見せたことはなかった。こだわりの理由は以下の通りである。このイギリス人の説得のお陰でシングルトン一行は「全とうな」方法で巨万の富を手に入れたからである。さらに言えば、裸のイギリス人は砲手とともにシングルトンがごろつき、放浪者から全とうな人間として帰国することを可能にしてくれた功労者である。彼の説得により、疲弊しきっていたにもかかわらず砂金の採取のため日程を大幅に遅らせる。採取した砂金は均等配分されることになり、シングルトンもかなりの資産の入手を保証される。

イギリス人の尽力により全うな人間として無事帰国を果たしても (137)、シングルトンは「祖国には信頼でき、相談のできる人」がいないため、悪い仲間と交わり、わずか2年間で全資産を放蕩三昧のうちに使い尽くし、もとの文無し状態に逆戻りしてしまう。このようにしてアイデンティティを確立出来ないまま最初の冒険は中途半端な形で終了する。シングルトンは12歳で英国を離れた時と少しも変わらないままつぎの冒険に船出せざるを得なくなる。

II 海賊行為

前半部ではアフリカ横断の冒険の際、交換価値に疎い裸の原住民と出会ったことで少なくとも無知な彼らとは自分は違うアイデンティティを持つという認識だけはできた。しかしシングルトンには風聞とはいえ紳士の生まれにふさわしいアイデンティティを回復するための試練・舞台が用意される必要がある。後半部は前半部では叶えられなかった「男らしい」男としてのアイデンティティ確立のための舞台設定がなされる。つまり資産形成のほかに悔悟、道徳への覚醒、宗教心の涵養、別の言い方をすれば、魂の浄化が必要になってくる。そうした観点に立って後半部のエピソードをいくつか見ていきたい。後半部は前半部と異なり、英国への帰路を除けば海が主な舞台になる。航跡は、カナリア諸島 (the Canaries, 141)→カリブ海域 (the West Indies, 141)→アラビア沿岸 (Arabia, 175)→台湾 (the Island Formosa, 198)→インド洋 (the Indian Ocean, 205) である。帰国時は陸路をバグダッド (Bagdat, 271)→ヴェニス (Venice, 272)

へと辿ることになる。広大な海域が先にあるのではなく、シングルトンらの海賊グループが安全に細心の注意を払いつつ、もっとも効率的な海賊行為、途中からは商取引を営むために移動を繰り返した結果が上述の広大な海域ということである。シングルトンらは広大な海域を移動する中で、陸地では想像もつかない量の現金・物資を、主に略奪行為によって入手する。この間に後で詳しく見ていくことになるが、命がけて蓄積した各国通貨および物資をもとにして、クウェーカー教徒で医師のウィリアムの助言により、ウィリアムの妹に対し慈善行為を重ねる。巧妙な善行が功を奏し、シングルトンは妹と結婚する。そして妹と作った家庭の中によくセンター (Centre, 276) を見い出せるはずである。

全体的に言えば、後半部も伝統的な意味での冒険から逸脱している。その一例として、住民との交戦のエピソードを見てみたい。海賊ものの場合、派手な戦を読者は当然のことながら、期待するはずであるが、後半部におけるもっとも大がかりな戦いは、ニューギニア (New Guinea) 近くの住民との小競り合いにすぎない。シングルトンの一行は海峡でのオランダ船による襲撃を避けるため、インド洋へ向かう。途中、飲料水と食糧の確保のためニューギニア近くの島へ立ち寄る。上陸した一行は和平の印に旗を浜辺に立てるが、住民は和平の合図を無視するかのように、弓矢で攻撃を仕掛けてくる。しかしインド洋航海を控えた一行は、食糧補給のため奥地へ向かうが、樹上からの投げ槍と弓矢による奇襲のため仲間を2人失う。樹上からの一方的な攻撃が続く中に、一行も反撃体制を整え、最終的には檣の巨木に何とか火薬を仕掛け、中にこもる住民もろとも爆破する。これにより両腕、両脚あるいは頭部が切断された住民の死体が砲弾のように散乱する。このエピソードで印象的なことは、住民の先制攻撃に対する報復の満足感と仲間の喪失に対する無念さよりも食糧の補充が叶わなかったことがより強調されることである。一行が住民の了承を得ないまま、勝手に侵入したこと、住民の言葉を解さないことが衝突の一因であることなどに語り手の分析がおよぶことはない。

洋上を漂う奴隸船との遭遇も後半部を特徴づけるエピソードの一つである。シングルトンの一行はブラジル沿岸で、600人以上の黒人を乗せたまま、洋上を漂う不思議な船に遭遇する。船がオランダで建造されフランスで改修されたことまではすぐに判明するが、不思議なことに白人の姿は一人も見当たらない。遭遇から10週間が経過した頃、英語が少し通じるようになって判明したことは、白人が黒人女性とその娘に対し二度にわたって乱暴を働いたことがもとで暴動になり、多数の死傷者を出しながらも、黒人側が勝利したが、黒人側は白人の報復を恐れ白人および武器弾薬類をことごとく海中に投棄したということである。このエピソードを通じて印象的なことは、ウィリアムの行動である。彼は暴動で重傷を負った黒人を見事に完治させたり、暴動に過剰反応する仲間に対し、「自然法」(the Law of Nature, 157) を持ち出し理詰めの説得を試みる。説得の結果、一行は労せず船と黒人奴隸の確保に成功するが、これまでの

海賊行為の露見を恐れるあまり、その先の展望を描けない。結局ウィリアムがブラジルの農園主に言葉巧みに取り入り、5週間をかけて600余名の黒人奴隷と船の売却益として6万エイト（スペイン銀貨）とスループ船一隻それに大量の食糧と火薬を持ち帰る。

莫大な富を生むことでは、東インド諸島での香料の略奪・取引は、ブラジル沿岸における奴隷貿易と同じである。シングルトンの一行はオランダ政府による香料の取引禁止令を巧みにかわして、南シナ海域での香料の奪取・取引をもくろむ。狙いを定めるのはニュースペイン（New Spain）のアカプルコ（Acapulco）からやって来るスペイン船とか中国のジャンクである。中国船襲撃の目的は、ニクズクとか丁字あるいは絹、綿モスリン、キャラコとか現金の奪取にある。オランダ政府の監視を巧みにくぐり抜け、奪取あるいは取引を続ける中に、積み荷は香料だけで200トン前後に達する。全員が積み荷の量に納得した頃、一行は積み荷の換金のため台湾海域をめざす。素性の露見を恐れるあまり、中国本土にある英国の在外商館を迂回することを忘れない。取引相手は中国人商人である。彼らは一行を海賊と知りつつも、この海域での商談の成立は、彼らにとっても航海の大幅な短縮につながるため、積極的に取引に応ずる。取引対象は60トンもの香料とリンネルおよびウール製品である。このエピソードで注意したいのは、この商談のさなかにウィリアムが日本人僧から13名の英国人（座礁のため日本に滞在中）がグリーンランド（Greenland）→北極点（the North Pole）経路による北方航路を開拓したという情報を入手することである。結果的には、一行の新航路への強い関心にもかかわらず、一足違いで日本人僧との再会が叶わず、それ以上の探索は不可能になる。しかしこのエピソードから東インド諸島の経済的魅力と同時に新航路の開拓に寄せる当時の熱意が読みとれるようである。

シングルトンはウィリアムと共謀して主として略奪行為により獲得した積み荷を巧みな方法で換金することで商人への変身を急ぐ。手段の是非はひとまず措くとして、富を築くことで商人としてのアイデンティティを確認でき、帰国の準備は整ったことになる。しかしデフォーはここですんなり、シングルトンを帰国させずに、彼に過去の罪業を後悔させることを忘れない。ウィリアムの感化を受けて内省が可能になり後悔を意識し始めると、莫大な額に達していた資産も、足もとの塵芥と同然のものと思われてくる。所有欲も当然のことながら萎えてしまう。それどころかシングルトンは自殺とか資産の遺棄すら考える。ここでウィリアムは、シングルトンに対し、手当たり次第に略奪した資産を元の所有者に返還することが現実的でないことをまず納得させる。実行可能な次善の策として、未亡人で4人の子供を抱えている自分の妹への送金という善行を代替案として提案し、それで何とかシングルトンの悩みの解決をはかる。妹はウィリアムの安否を気遣う手紙に対し、近況を伝えると同時に帰国費用の足しにと5ポンドを同封してくる。ふたりは妹の優しさに涙を禁じ得ない。妹の人柄を見込んだふたりは

妹の金銭感覚を麻痺させないように、こまめに送金を続ける。まず160ポンド、10日後に540ポンド、さらに、2週間後に300ポンド、合計1000ポンドという送金方法である。送金額は5000ポンドに達する。

結論

シングルトンはウィリアムと共に莫大な資産を携え帰国する。一方、妹はウィリアムの指示に従い、病気を口実にして、叔父にも内緒であらかじめ故郷の店をたたみ、ロンドン近郊に新居を構えている。シングルトンは商人としてのアイデンティティを確立し、帰国後結婚した妹との家庭によやくセンター (Centre, 276) を見出すことになる。しかし忘れてならないことは、帰国・定住に際しシングルトンとウィリアムが結んだ4項目からなる契約である。契約を列挙するとつぎのようになる。

- ①妹以外の誰に対しても素性を隠すこと
- ②ギリシャ風の髭を剃らずに、ギリシャ人 (外国人) として暮らすこと
- ③妹以外に対して絶対に英語を使わないこと
- ④兄弟の絆を結ぶこと

シングルトンは人世の師 (my Ghostly Father, 268) として仰ぐウィリアムの感化で何とか魂の浄化を済ませ、莫大な資産と共に帰国を果たす。商人としてのアイデンティティも確立し、ウィリアムの妹との家庭の中にセンターを見出したわけである。シングルトンの言葉を借りれば、「結婚によって閉ざされていた英国社会への扉が開かれた」にもかかわらず、彼は英語を捨て、ギリシャ人 (外国人) として生きる以外にすべがない。つまりセンターは自分の中にしか存在しないことになる。男らしくないヒーローは放浪生活 (a vagrant Life, 268) を続けながら、アフリカ横断旅行中に会った砲手、裸のイギリス人とウィリアムとの交流を通じて商人としてのアイデンティティの確立にこぎつけながら英国社会では incognito な状態でしか生きていけない。外国人として暮らすことは、海賊としての過去を隠す必要から生じた苦肉の策であることに違いはない。しかし貴族的でない、その意味でひ弱なヒーローは、生きる拠り所として金銭に固執し、財を築いて帰国しても英国内では「男らしく」生きられない。英国外での放浪生活中は可能であった「平等主義」など夢のまた夢である。

引用・参考文献

- Defoe, Daniel. *The Life, Adventures, and Piracies, of the Famous Captain Singleton*. Oxford University Press, 1990.
- . *The History and Remarkable Life of the Truly Honourable Col. Jacque Commonly Call'd Col. Jack*. Oxford University Press, 1989.
- . *Moll Franders*. Penguin Books, 1989.
- . *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*. Oxford University Press, 1981.
- Gregg, Steephenson H. *Defoe's Writings and Manliness*. Ashgate, 2009.
- Guilhamet, Leon. *Defoe and the Whig Novel*. Newark: University of Delaware Press, 2010.
- Maniquis, Robert and Fisher, Carl, (eds). *Defoe's Footprints*. The University of Toront Press, 2009.
- Richetti, John. *The Life of Daniel Defoe*. Blackwell Publishing, 2005.
- Sutherland, James. *Daniel Defoe, A Critical Study*. Harvard University Press, 1971.
- West, Richard. *Daniel Defoe: The Life and Strange, Surprising Adventures*. Carroll & Graf Publishers, 1998.
- 榎本 太『十八世紀イギリス小説とその周辺』、日本図書刊行会、2005年。
- 仙波豊ほか編『未分化の母体 十八世紀英文学論集』、英宝社、2007年。
- 宮崎孝一『ダニエル・デフォー アンビヴァレンスの航跡』、研究社出版、1991年。
- ジョージ・L・モッセ『男のイメージ 男性性の創造と近代社会』、作品社、2005年。